

アレクサンドラ・ヤロシュ（コペルニクス大学准教授・琉球大学客員研究員）

要旨

本稿では、上代中央語におけるヤ行のエ・ア行のエの区別、すなわちエ甲・エ乙の区別との歴史的な関係を中心に、日琉祖語に遡れるという宮古語来間方言の保守的な要素を紹介する。その環境は主に宮古祖語の*aで始まる二重母音である。

他の宮古諸方言における二重母音 ai が来間方言の長母音 e: に相当する場合を検討する。宮古諸方言と上代中央語との比較を通して、are: 「洗え」のように、来間方言の命令形はエ甲に対応する痕跡を保っていると論じる。一方、宮古語多良間方言において長母音 e: が現れるのは接続形 — 已然形対応形 — である。これは上代中央語の命令形にエ甲、已然形にエ乙が現れていたような、日琉祖語から継承した区別と思われる。宮古祖語で前者を*aje、後者を*ae と再建する。さらに、来間方言の受身・可能形に-ari と-re: という2形式があり、これらも甲乙の区別に相当し、上代の-ru と-je 形式に対応しているとする。

本文

2018 年、2019 年に宮古群島来間島で行われた調査研究の結果、宮古語来間方言で日琉祖語まで遡り得るという保守的な区別が保たれているかもしれないことを示唆するデータを集められた。本稿では、奈良時代の本土中央方言（以下：上代中央語）の甲類エ（ヤ行のエ）、乙類エ（ア行のエ）と対応関係にある音韻を中心に来間方言のそのような古い姿について考察していく。

甲乙エの区別に相当する音韻が保たれていると思われるのは来間方言の e: に対して他の宮古諸方言で ai が現れる場合である。したがって、宮古祖語の*a に続く位置がこの痕跡が表面化する条件であると考えられる。

宮古語の多くの方言では、音韻上の長母音 e: が存在していない。その著しい例外として多良間方言が挙げられる。ところが、来間方言にも e: というかなり生産的な音韻が確認されている。しかも、本稿で掲載しているいくつかの表で見えていくように、多良間の e: と来間の e: が異なる項目で現れる場合があり、そのような場合は両者が系統を異にしていることが明らかである。したがって、来間と多良間で e: が出ている宮古語諸方言の同根語を比較することによって、来間方言のデータ抜きでは見逃しがちの祖語の姿が浮き彫りになるだろう。

本稿では、筆者の調査や先行研究（内間 2003、杉村 2003 など）のデータに基づき来間方言の e: と上代中央語のエ甲との関係について検討する。多良間方言、平良方言や伊良部仲地方言のような他の宮古語諸方言も参考にし来間方言の該当項目と比較しながら、結果を日琉祖語に関連付かせるような考察も行う。

上代中央語の形式は主に Martin 1987 と Vovin 2009 に沿って挙げる。来間以外の宮古諸方言のデータは下地 2006、下地 2017、富浜 2013、平山 1983、Jarosz 2015 で掲載のネフスキー調査ノート、および筆者自身の調査ノートに基づく。

1. 来間方言の e: と日琉祖語

1.1. 上代中央語 e の由来 — 服部説

本稿の出発点として、上代中央語のエ甲、エ乙の由来に関する服部四郎の見解を紹介する。

表 1 は服部 1978-79 : 335 から抽出したものである。上代中央語のエ甲、エ乙は日琉祖語のどの音韻に遡れるか、さらにその日琉祖語の音韻は「先首里方言」¹でどのように反映されているかというデータを提示する。

¹ 服部はこれを「首里方言 A 時代」と呼び、15 世紀末以前に設定している（服部 1978-79 : 145 以降）。本稿の「先首里方言」を英語の Pre-Shuri の意味で使う。

当然ながら、「先首里方言」は宮古祖語とは異なる琉球語派の下位区分に入っており、この意味では宮古祖語と直接関係がないが、上代中央語より宮古祖語と近い親縁関係にあるものとして、参考までに取り上げることにした。

表1 上代中央語の甲乙エとその起源（服部説）

先首里方言	上代中央方言	日琉祖語
*e, *ee	e 甲 = je	*ia
*e, *ee	e 甲 = je	*ee
*e, *ee	e 乙 = e	*ai

1.2. 来間方言命令形の e: と上代中央語

来間方言の e: が他の宮古諸方言の ai、そして上代中央語のエ甲に対応する例は、命令形で確認されている。ただし、正確に言えば、この対応関係は表2のように、ko: 「買う」、fo: 「食べる」、aro: 「洗う」、juku: 「休む」のような語幹末が o、もしくは u という動詞の場合に限られている。

表2 宮古語諸方言の命令形 母音語幹末強変化動詞

	来間	多良間	平良	伊良部仲地	宮古祖語
買う	ke:	kai	未詳	kai	*kaje
食べる	fe:	fai	fai	fai	*faje
洗う	are:	arai	arai	arai	*araje
休む	juke:	未詳 「思う」が umai	未詳 「思う」が umui	jukui	*jukuje

上代中央語の命令形接尾辞 -je は四段動詞、ラ変動詞とカ変動詞との共起が実証されている（Vovin 2009:647）。来間方言の o 語幹末と系統を共通にしている ipapu 「祝う」のような動詞の命令形も ipapje （Vovin 2009:651）のように、エ甲の接尾辞を示している。

さらに、Vovin 2009:647 の仮説によれば、この上代中央語の -je は連用形接尾辞 -i と元々の命令形接尾辞 -*a、つまり -*ia > je の融合により発生した形式である。この説を採用すれば、来間方言には日琉祖語の -*ia の上代中央語のエ甲よりも古い痕跡が保たれる可能性に至る。なぜなら、表3で提示するように、来間方言では他の強変化動詞の場合にも半狭母音 e が出ているためである。これは t, s, z, r という舌頂子音が語幹末に立つ場合も含む。要するに、舌頂子音の後に甲乙の区別を持っていない（あるいは残していない？）上代中央語より来間方言がこの点で日琉祖語の姿に近いかもしれない。

表3 宮古語諸方言の命令形 子音語幹末強変化動詞

	来間	多良間	平良	伊良部仲地	宮古祖語
読む	jume	jumi	jumi	jumi	*jumje
漕ぐ	kuge	kugi	kugi	kugi	*kugje
押す	uee	uei	uei	uei	*uee
待つ	matee	mati	matei	matei	*matje
作る	tsiffe	tsiffi	tsiffi	tsuffi	*tsiffje

一方、内間 2003 : 76、79 の報告によれば、来間方言では「[i] と [e] の交替もしばしば見られる」らしく、簡単に来間方言の i と e が音韻的な対立を成しているという結論に至るわけでもない。杉村 2003 : 19～20 のデータを見ても、jumi と jume、kugi と kuge など、このような i と e の交替は命令形にも認められる。したがって、表3のデータに関しては更なる慎重な議論が要る。

ところが、命令形では例えば jume ~ jumi のような交替が可能としても、逆に接続形（表4参照）で jumi を jume に置き換えることができない様子から、わずかながらもやはり短母音の i と e の区別が来間方言で保たれているようである。なお、同じく杉村 2003 : 19～20 曰く、語末 i の命令形の変

種は女性や若年層の話者の言葉に出る傾向があり、これは比較的に現代的、かつ社会言語学的な現象であることを示唆しているのだろう²。

1.3. 来間方言と多良間方言の接続形

来間方言で e: と共に二重母音 ai も存在しており、前述したように、両者が意味的な対立を成し得る証拠には接続形がある。表 4 では来間方言の接続形をいくつか紹介し、比較までに他の宮古諸方言の接続形の例も提供する。

本稿で言う接続形とは、古代日本語における已然形対応形³のことで、動名詞接尾辞（狩俣 2012 などのシテ中止形）-tti、確定条件接尾辞-ba などと接続させる形式である。この形式はいわゆるシアリ中止形と区別させるべきである。来間のように、一部の方言で形が合流しているとは言え、kikitti: 「聞いて」と kiki: bul 「聞いている」のように、多良間方言などでは母音の短長をもって対立する異なる形になっている地域言葉もあるためである。

なお、kakiba ではなく kakiba のように、多良間方言では確定条件-ba が接続するのは已然形対応形の代わりに連用形対応形³なので、表 4 で比較の対象として取り上げているものは多良間の-tti 系動名詞だけである。

表 4 宮古語諸方言の接続形

	来間	多良間	平良	伊良部仲地
買う	kai	ke:	kai	kai
食べる	fai	fe:	fai	fai
洗う	arai	are:	arai	arai
休む	jukui	未詳 「思う」が ume:	jukui	jukui
読む	jumi	jumi	jumi	jumja: <*jumi + ba
漕ぐ	kugi	kugi	kugi	kugja: <*kugi + ja
押す	uei	uei	uei	uei
待つ	matei	mati	matei	matei
作る	tsiffi	tsiffi	tsiffi	tsuffja: <*tsuffi + ba

表 4 から分かるように、来間方言では母音語幹末動詞の接続形は該当音韻が ai で、fe: 「食べなさい」と fai 「食べて」、are: 「洗いなさい」と arai 「洗って」のように e: の命令形と対立を成している。

平良方言と仲地方言の接続形は案の定、命令形と同音形式になっている。

ところが多良間方言では他の方言の ai に対して e: が現れている。すなわち多良間方言の場合は来間方言と正反対となっており、それで両形式の接尾辞が宮古祖語の段階まで音韻的に対立していたことが明らかになる。

もし宮古語の接続形が実際に上代語の已然形の純粋な対応形であるならば⁴、多良間方言のこの e: < 宮古祖語 *ae （表 5 参照）もエ乙に相当する日琉祖語の痕跡であることになる。

なお、母音語幹末動詞以外には多良間方言でも命令形と接続形が同音になっており、来間方言にあるような対立を失っている。

1.4. 宮古祖語の命令形と接続形

表 5 では、表 2~4 の内容を踏まえ、宮古祖語の命令形と接続形の再建を提案する。

² 筆者がご協力をいただいている話者は 60 代の男性で、その命令形の語末母音はやはり揺るぎなく e である。

³ その原因として、連用形対応形に接続している-tika 確定条件形への類推が考えられる。

⁴ Syromiatnikov 1981:101 は已然形において、甲乙の区別のあった音節の中核をエ乙とする。Martin 1987:62 によると、上代中央語のエ甲がめったに現れないため、甲乙の標識のないエ段の母音もエ乙と解釈すれば妥当という。Frellesvig 2008、Vovin 2009、Frellesvig & Whitman 2008 で報告されている諸先行研究なども已然形の語形末母音を乙類扱いしているようである。

表 5 宮古祖語の命令形と接続形 母音語末動詞

	命令形	接続形
買う	*kaje	*kae
食べる	*faje	*fae
洗う	*araje	*arae
休む	*jukuje	*jukue

子音語幹末動詞の再建に関してはさらなる検討が必要であるが、来間方言の表 3 のデータを筆者が正しく解釈しているなら、少なくとも命令形は暫定的に*jumje、*kugje、*uee のように*je をもって再建できよう。一方、子音語幹末動詞の接続形では宮古諸方言において*e > i の完全な狭母音化が起きており、宮古祖語の接続形も*e をもって再建する理由が特にならない。それどころか、子音に続く*e > i の狭母音化が先島祖語時代から進んでいたと思われる宮古祖語の音韻の体系性という点から見ればやはり子音語幹末動詞の接続形も*jumi、*kugi、*uei とした方が妥当であろう。

2. 受身接尾辞の 2 種類

表 6 で、来間方言の受身形・可能形の例とそれに相当する平良方言、多良間方言の語形をいくつか紹介する。

表 6 宮古諸方言における受身・可能形

	来間	平良	多良間
強変化	uteariz 「打たれる」 zzariz 「叱られる」 tsikariz 「使われる」 ikariz 「行ける」 katearun 「勝てない」 ikarun 「行けない」 numarun 「飲めない」 fa:run 「食べれない」	azzaiz 「言われる」 zzaiz 「叱られる」 turaiz 「取られる」 jumaiz 「読める」 ssain 「わからない」 逐語訳「知れない」 ujugain 「泳げない」	baraiz 「笑われる」 zzaiz 「叱られる」 turail 「取られる」 numail 「飲める」 ikail 「行ける」 parai:n 「払えない」 aikain 「歩けない」 fa:in 「食べれない」
	nure:z 「乗れる」 nuro:n 「乗れない」 nja:run ~ nja:ro:n 「縫えない」 jukaro:n 「休めない」	sa:raiz 「連れられる」	nurain 「上れない」 barariz 「笑われる」
弱変化	ubuire:z 「覚えられる」 amaire:z 「笑われる」 tumiro:n 「見つけれない」	mi:raiz 「見られる」 ukiraiz 「起きられる」 akirain 「開けれない」	mi:rail 「見られる」 tumirail 「見つけれられる」 mi:rarin 「見られない」 ki:rail 「着られる」 baceirain ~ bassirarin 「忘れられない」
いる	uro:n 「いられない」	uraiz 「いられる」 urain 「いられない」	burain 「いられない」
来る	ku:re:z 「来られる」	ku:rain 「来られない」	未詳
する	eire:z ~ aeire:z 「できる」 aeiro:n 「できない」	eiraiz ~ eirariz 「できる」 eirain 「できない」	eirail 「できる」 eirain ~ eirarin 「できない」

平良方言と多良間方言では受身・可能の接尾辞は活用タイプにかかわらず、そして肯定・否定を問わず-ai/-rai である。一方、平良の「できる」、多良間の「笑われる」、「忘れられない」、「できない」、「見られない」のように、-ari/-rari という一見で-ai/-rai の異形態に見える変種も確認されてい

る。この $-ari/-rari$ は頻度が $-ai/-rai$ より大幅に低い、しかも両者の使い分けも見られなく、混用がかなり進んでいるようである。

ところが、来間方言では受身・可能接尾辞は形式が明確に $-ari$ (肯) $/-aru$ (否) と $-re:$ (肯) $/-ro:$ (否) という2つの形式に分けられている。一般的に $-ari$ が強変化動詞と共起し、 $-re:$ が弱変化動詞と不規則動詞と共起する（ここで「乗れる・乗れない」のように、 r 語幹末の動詞の「弱変化」が目立つ）。 fo :「食べる」、 nu :「縫う」 $juku$:「休む」のように、母音語幹末の強変化動詞以外に $-ari$ 系と $-re:$ 系の接尾辞の混用がなく、両者がほぼ明確な相互分布にあると言える。

$-ari$ 系と $-re:$ 系は系統の異なる2つの形式ということが表7からもわかる。すなわち、来間方言も含めた宮古諸方言では、「鳥」、「軽い」のように、琉球祖語の狭母音 $*i$, $*u$ が後続する場合に限り $*r$ が脱落する。それに対して、「生まれる」、「降りる」のように、琉球祖語 $*e$ の前では $*r$ が保たれている。したがって、もし来間の $-ari$ と平良、多良間などの $-ai$ は系統が同じとするなら、どうして来間だけは r が保存されているか、しかもどうして保存されているのは強変化動詞の場合だけなのか、という満足に答えにくい問に応じなければならないことになる。

表7 宮古語諸方言における $*r$ の痕跡

	来間	平良	多良間	宮古祖語	琉球祖語
鳥	tuz	tuz	tul	*turi	*tori
軽い	kaz	kaz	kal	*kari	*karu
降りる	uriz	uriz	uril	*uriri	*oreru
生まれる	mmariz	mmariz	mmaril	*mmariri	*umareru

ここまで考察してきた宮古諸方言間の音韻体系という観点から、 $-ari$ は宮古祖語で $*ari$ 、 $-re:$ は宮古祖語で $*raje$ と再建できよう。

来間方言と上代日本語の音韻対応からすれば、 $-re:$ が上代中央語のエ甲、 $-ari$ が上代中央語のエ乙と系統の同じ音韻を含むはずで、それぞれが日琉祖語の $*ria \sim *ree$ と $*arai$ を反映しているかもしれない。

Frellesvig 2010: 63-64, Vovin 2009: 828-843 などでも取り上げられているように、上代中央語においては $-(a)je/(-raje)$ と $-are$ という2つの受身・可能形式が報告されている。両者の機能は同じだったらしく、受身・自発・可能標識として平行に使われていたという。平安時代以降と反対に、奈良時代以前は $-re/(-rare)$ より $-je/(-raje)$ の方が盛んだった。ただし、 $-raje$ という弱変化動詞に接続する異形態の用例が文献上4つしか発見されていなく、果たして動詞活用の生産的な接尾辞だったのか、研究者の意見が分かれているようである⁵。

$-(a)je$ が接続していた活用タイプは四段、上一段、ナ変とラ変だった一方、 $-are$ が接続していたのは四段、ナ変とラ変だった (Frellesvig 2010:63)。すなわち、上一段以外に両者の相互分布が見られず、やはりすでに混用がやや進んでいたのであろう。なお、一段、二段動詞、そしてカ変とサ変に接続する $-rare$ 接尾辞は平安時代になって初めて実例が登場することから、これは類推によって上代以降に新しくできた形態素という可能性が高い (Frellesvig 2010:237)。

来間方言の該当形式は強変化動詞において $-are$ 対応形、弱変化動詞、語末 r の強変化動詞、存在動詞、「する」と「来る」においては $-raje$ 対応形である。この分布は上述の上代中央語のとはほぼ一致している。特に、 $-rare$ 対応形が見当たらないのは、上代日本語にも実証されておらず、したがって日琉祖語にも存在していたはずがないという解釈を考慮すべしなすける事態だろう。一方、 $-raje$ 対応形は来間方言の弱変化動詞活用などにおいて生産的な接尾辞であることは、ステータスの不確かな上代中央語 $-raje$ の存在の裏付けにもなり、日琉祖語段階の弱変化動詞 — 上代中央語で言う二段動詞も含めて — の接尾辞としてこの $-raje$ の祖形の設定も支えると思われる。

このように、来間方言の $-ari$ 、 $-re:$ の両形式は日琉祖語から継承してきたと判断できるだろう。一方、他の宮古諸方言では受身・可能形式が多く $-aje/-raje$ 系に推移してしまっている。多良間方言のよう

⁵ 例えば Frellesvig & Whitman 2008 の諸論文で述べられているように、四段や一段に比べれば、二段動詞は成立が遅く、二次的な派生の活用グループなので、そのパラダイムも上代という段階でまだ不完全だったという。これを背景に、上代の二段動詞はまだ受身形を取れなく、したがって受身形式の $-raje$ の出番もなかった、と Frellesvig 2010:64 は断定している。

に、一部の方言において両形式が所々現れるとしても、形態上、機能上で完全に混用されており、しかも-aje/-raje 系の方が明らかに有力なパターンになっている。

ちなみに、宮古語に系統的に最も近い八重山語では類推の逆方向が見られ、四箇方言の jumarirun「読める」、ukirairun「受けられる」のように、-are/-rare 系の勝ちである。ただし、波照間方言だけは hakairun「書かれる」、mwairun「思える」のように-aje/-raje 系と思われる形式も見られる。それらの-are/-rare 系との分布、使い分けなどが未詳である。

3. 不明な点・今後の課題

以上検討したデータを見ても明確になっていない点、さらなる追究が必要な問題点などがいくつか挙げられる。

1 つは、命令形と受身・可能形、要するに動詞の活用形態素以外にエ甲に対応している来間方言の項目が確認されていないという現状である。Martin 1987 曰く、上代中央語においてもエ甲はもともと頻度の低い音韻だったため、当然な結果かもしれない。しかし、語彙的な形態素にもエ甲に相当しているような音韻を含む来間方言の項目が発見できれば日琉祖語の再建に有用に違いない。

逆に、語彙的な形態素で来間方言の e:を含む項目は、上代中央語の同根語が確認されている場合、fute:「額」、ire:「答え」(irapu「答える」の連用形対応形)、ffe:「肥料」(kurapu「食べる」の連用形対応形)のようにエ甲ではなく、i、おそらくイ甲に対応しているのである。服部 1978-79:335 によれば、「先首里方言」の*e で、上代中央語で i になっている音韻は日琉祖語の*e の痕跡であるらしい。したがって、ここで立てられる仮説としては、日琉祖語の*e も、*ia も該当環境で宮古祖語の時代までに

*ae > *aje, *aia > *aje

のように合流し、この*aje が現在来間方言の e:になっている、ということである。

それに対して、上代中央語で

*ae > ai, *aia > aje

のような変化が起きており、それで両者の痕跡が区別されているということになる。

ただし、この仮説の妥当性を確かめるためには、より精密な検討が必要である。

さらに重要な問題点として登場するのは、宮古語と上代中央語の同根語の中に、上代中央語の方でエ甲が入っていても、動詞の活用形態素以外の項目は来間方言の mai「前」、kaisi「返す」、nai「苗」のように、e:への融合がおきておらず、他の宮古語諸方言と全く同じ痕跡 ai を示している点である。来間方言の命令形と受身・可能形の e:が実際にエ甲に対応することを証明するならば、この疑問も視野に入れ、以下の2つの可能性を検証しなければならない。

1. 来間方言の動詞活用形態素だけにおいて、何らかの類推過程を原因に、*je > i という変化が起きていない仮説。

2. 上代中央語においては同じエ甲になっても、mai「前」、kaisi「返す」、nai「苗」は fe:「食べなさい」、mire:z「見られる」とは異なる日琉祖語の音韻から由来する仮説。

上の仮説でどちらかが有力かは現在言及できない。どちらか(それともどちらも?)の実証、もしくはどちらももの否定を今後の課題とする。

参考文献

- 内間直仁代表 2003。『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に』。文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。那覇市：国際印刷。
- 狩俣繁久 2012。「宮古語の動詞活用—代表形、否定形、過去形、中止形」。木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』。東京都・国立国語研究所。
- 下地賀代子 2006。『多良間方言の空間と時間の表現』。千葉市：千葉大学学院社会文化科学研究科。
- 下地賀代子 2017。『たらまふつ辞典。多良間方言基礎語彙』。多良間村・多良間村教育委員会。
- 杉村孝夫 2003。『来間方言の記述的研究』。平成 13 年～14 年度文部科学省研究費補助金基盤研究成果報告書。
- 富浜定吉 2013。『宮古伊良部方言辞典』。那覇市・沖縄タイムス社。
- 服部四郎 1978-1979。『日本祖語について』。服部 2018 にて。87-403 ページ。
- 服部四郎 2018。『日本祖語の再建』。上野善道補注。東京都：岩波書店。

- Frellesvig, Bjarke and John Whitman 2008. *Proto-Japanese. Issues and prospects*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Frellesvig, Bjarke 2010. *A history of the Japanese language*. New York: Cambridge University Press.
- Jarosz, Aleksandra 2015. *Nikolay Nevskiy's Miyakoan Dictionary: reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*. Poznan: Chair of Oriental Studies, Faculty of Modern Languages and Literature Ph.D. thesis.
- Martin, Samuel Elmo 1987. *The Japanese Language Through Time*. New Haven and London: Yale University Press.
- Syromiatnikov, N[ikolay] A[lexandrovich]. 1981. *The ancient Japanese language*. Translated from Russian by Y. N. Filipov. Moscow: "Nauka" Publishing House.
- Vovin, Alexander 2009. *A descriptive and comparative grammar of Western Old Japanese. Part 2: Adjectives, verbs, adverbs, conjunctions, particles, postpositions*. Folkestone: Global Oriental.